



東南アジア

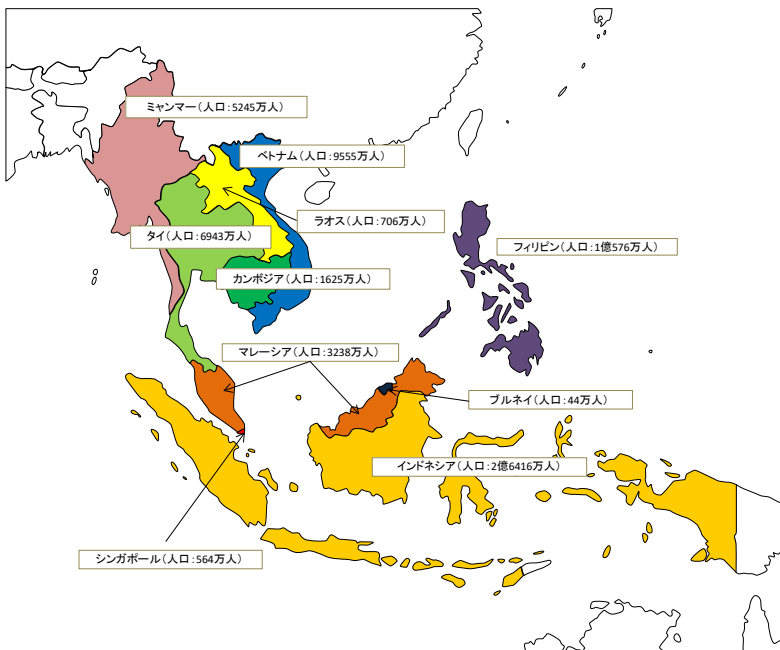
1 農・畜産業の概況

アジア開発銀行によると、ASEAN（東南アジア諸国連合）加盟10カ国（図1）のうち、シンガポールとブルネイは、GDPに占める農業の割合が1%以下と低く、経済成長の著しいマレーシア、タイ、インドネシア、フィリピン、ベトナムの5カ国（以下「5カ国」という）は、7～15%（2018年）となっており、年々その割合は低下している（表1）。5カ国では、都市と農村の経済格差が顕著になっている中で、農村は失業者の緩衝機能を果たしているといわれている。また、コメなどの主要作物の価格が政策的に低く抑えられているため、農業分野の産出額が増加しないという特徴も有している。上記以外の残り3カ国は、カンボジアが22.0%（2018年、前年比3.0ポイント低下）、ミャンマー

が23.0%（同年、同0.7ポイント低下）、ラオスが17.7%（同年、同0.6ポイント低下）と前年よりは減少しているものの依然として高くなっている。これらの3カ国は、政情不安が長引いたことなどから農業以外の産業の発展が遅れており、相対的に農業の比重が高い。しかし、政情の安定化に伴う経済の発展により、その割合は低下してきている。

国別には、マレーシアは、油ヤシ、天然ゴムなど永年性作物の栽培が盛んな一方、フィリピンは、トウモロコシ、コメなどの穀物が中心となっているという特徴がある。畜産業については、食習慣、宗教、農業の形態などを反映して、各国ごとに畜種の重要度が異なっているため、品目ごとの生産量には大きな差がある。

図1 ASEAN加盟国



資料：国際通貨基金（IMF）「World Economic Outlook Database」
注：数値は2018年

表1 GDPに占める農業の割合（2018年）

国	割合 (%)
シンガポール	0.0
ブルネイ	1.0
タイ	8.1
マレーシア	7.5
フィリピン	9.3
インドネシア	12.8
ベトナム	14.7
ラオス	17.7
ミャンマー	23.0
カンボジア	22.0

資料：アジア開発銀行

ASEAN各国の主要穀物および畜産物の生産量を見ると、米が多い。また、主要な畜産物は、豚肉および鶏肉であるが、宗教上の理由から豚肉を消費しないイスラム教徒の人口が多いインドネシアやマレーシアなどでは

鶏肉が多く、宗教上の制約が比較的少ないベトナムやフィリピンでは豚肉が多い（表2）。

表2 ASEANの主要穀物および畜産物の生産量（シンガポール、ブルネイを除く）

（単位：千トン）

国	年	米	トウモロコシ	牛肉	豚肉	鶏肉	鳥卵	生乳
マレーシア	2014	1,835	59	53	218	1,416	728	84
	2015	2,741	62	50	223	1,511	779	84
	2016	2,740	65	48	195	1,654	821	51
	2017	2,902	73	50	194	1,648	858	52
	2018	2,719	76	51	186	1,766	857	52
タイ	2014	32,620	4,805	162	949	1,757	732	1,067
	2015	27,702	4,730	147	941	1,621	681	1,000
	2016	25,312	4,815	150	1,005	1,733	684	1,100
	2017	32,688	4,959	135	994	1,734	690	652
	2018	32,192	5,004	152	999	1,727	702	654
インドネシア	2014	70,846	19,008	533	302	1,939	1,244	1,418
	2015	75,398	19,612	542	330	2,031	1,373	1,464
	2016	79,355	23,578	550	340	2,301	1,486	1,517
	2017	81,149	28,924	564	344	3,176	4,633	1,540
	2018	83,037	30,254	563	327	3,410	4,688	1,512
フィリピン	2014	18,968	7,771	301	1,691	1,115	416	20
	2015	18,150	7,519	305	1,776	1,186	445	20
	2016	17,627	7,219	312	1,863	1,227	462	20
	2017	19,276	7,915	311	1,837	1,267	492	20
	2018	19,066	7,772	311	1,873	1,345	534	15
ベトナム	2014	44,974	5,203	379	3,351	633	414	578
	2015	45,091	5,287	385	3,492	701	444	751
	2016	43,112	5,244	395	3,665	741	472	823
	2017	42,764	5,110	410	3,733	786	532	909
	2018	44,046	4,874	427	3,816	840	582	963
ラオス	2014	4,002	1,412	50	69	25	17	56
	2015	4,102	1,516	52	72	27	14	57
	2016	4,149	1,552	53	69	25	16	59
	2017	4,040	1,193	54	70	26	15	60
	2018	3,585	982	53	70	26	16	61
カンボジア	2014	9,324	550	65	112	17	20	25
	2015	9,335	400	64	110	17	19	24
	2016	9,952	663	67	107	17	19	24
	2017	10,350	750	68	96	18	20	24
	2018	10,647	604	67	86	17	19	24
ミャンマー	2014	26,423	1,693	369	821	1,390	472	2,151
	2015	26,210	1,749	402	863	1,505	510	2,361
	2016	25,673	1,831	451	874	1,521	542	2,415
	2017	25,625	1,909	480	923	1,500	561	2,411
	2018	25,418	1,983	470	1,063	1,729	576	1,318

資料：国際連合食糧農業機関（FAO）の「FAOSTAT」

注1：牛肉は水牛肉を、鳥卵は鶏卵および鶏卵以外の鳥の卵を、生乳は水牛、めん羊・ヤギの乳を含む。

注2：トウモロコシは青刈トウモロコシを含む。

注3：過去にさかのぼって数値が変更される場合がある。

注4：黄色部は各品目における2018年の最大生産量の国を示す。

表3 5カ国の畜産物の1人当たりの消費量

(単位: kg/人)

国	牛肉	豚肉	鶏肉	鳥卵	生乳
インドネシア	3	1	14	18	14
マレーシア	8	8	52	22	56
フィリピン	5	23	20	5	23
タイ	2	21	15	12	36
ベトナム	11	40	18	7	27

資料：生産量は各国統計、人口は国際通貨基金、それ以外は国際連合食糧農業機関の「FAOSTAT」

注1：牛肉は水牛肉を含む。

2：消費量は、「生産量+輸入量-輸出量」で算出。

3：マレーシアの生産量は半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

4：黄色部は各品目における2018年の1人当たりの消費量が最大の国を示す。

2 東南アジア諸国の畜産の動向

(1) 酪農・乳業

ASEAN諸国では、高温・多湿な気候条件が乳用牛の飼養にあまり適しておらず、良質な飼料の自給も困難であり、酪農・乳業は欧米諸国に比べて盛んではないことから、牛乳・乳製品は、伝統的に一般的な食材とは言えない。また、流通やインフラの関係から、消費される乳製品は、主に全粉乳などの粉乳類か、缶入り加糖れん乳が中心であった。しかし、近年はコールドチェーンの発達や経済発展に伴い、特に都市部およびその周辺では飲用乳の需要も高まりつつある。

各国とも、脆弱な酪農生産基盤により牛乳・乳製品の自給にはほど遠い現状にあるが、2.6億人の人口を有し、近年、経済発展を遂げているインドネシアについては、乳製品需要の伸びが期待されている。

一方で、ASEAN各国では、公的な統計に反映される生乳生産量が少ないことから、乳製品需給動向の正確な把握は困難となっている。

① 生乳生産動向

2018年の乳用牛飼養頭数および生乳生産量は、マレーシアの飼養頭数は減少したものの、乳製品需要の高まりを背景に増加傾向にある（図2、表3）。

国別に見ると、インドネシアでは、乳用牛飼養頭数は58万頭（前年比7.8%増）、生乳生産量は95万1000トン（同2.5%増）であった。乳用牛の大部分はジャワ島のジャカルタなどの大消費地に近い冷涼

な気候の山岳地域で飼養されている。乳用牛の遺伝的能力が低く、零細な経営が多くを占めている。インドネシア政府は、牛肉の国内自給率を90%にするという目標のために、2012年から生体牛および牛肉の輸入規制などを行った結果、国内の牛肉需給がひっ迫し、これを補うために、国内の乳用牛のと畜頭数が増加し、乳用牛が大幅に減少することとなった。2013年下期から、国内牛肉価格で輸入の可否を判断する基準価格方式の導入などにより、輸入規制が緩和されたことで、2014年以降は、飼養頭数、生乳生産量ともに増加傾向にある。

マレーシアの乳用牛飼養頭数は3万2400頭（同1.4%減）であった。飼養頭数が多いのは、シンガポールに国境を接するジョホール州、首都クアラルンプール近郊のスランゴール州、北西部のペラ州などである。同年の生乳生産量は3万9000トン（同5.2%増）となっている。歴史的に油ヤシや天然ゴムのプランテーションとしての土地利用が多く、反すう家畜のための飼料基盤は限定的となっている。

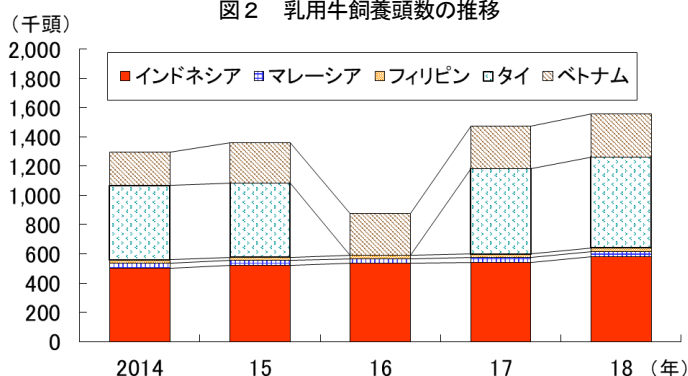
フィリピンでは、乳用牛飼養頭数は2万6000頭（同1.2%増）となっており、そのほか、水牛が乳用として飼養されている。生乳生産量は2万4000トン（同3.9%増）となり、うち約6割が牛由来、残りの4割は水牛乳とヤギ乳とみられている。

タイでは、乳用牛飼養頭数は、62万3400頭（同6.7%増）で、生乳生産量は123万3000トン（同

3.0%増)となっている。飼養頭数は、2009年以降、経済発展による食の多様化や学校給食用をはじめとする飲用乳需要の増加を反映し、増加傾向で推移している。

ベトナムでは、乳用牛飼養頭数は、29万4400頭(同1.5%増)で、生乳生産量は93万6000トン(同6.2%増)となっている。乳用牛の約5割は、主要消費地となるホーチミン市近郊で飼養されている。2001年に政府が酪農振興計画を打ち出して以来、ビナムミルク、THミルクなど大手乳業企業による大規模酪農場の開設などを背景に、飼養頭数、生乳生産量ともに増加している。

図2 乳用牛飼養頭数の推移



資料：各国政府統計
注：2016年のタイの数値は未公表。

表3 乳用牛飼養頭数と生乳生産動向(2018年)

国名	飼養頭数	(単位：千頭、千トン)	
		前年比(増減率)	生乳生産量
インドネシア	582.0	7.8%	951
マレーシア	32.4	▲1.4%	39
フィリピン	26.0	1.2%	24
タイ	623.4	6.7%	1,233
ベトナム	294.4	1.5%	936

資料：各国政府統計
注1：マレーシアの飼養頭数は半島部のみ(サバ、サラワク州を含まず)。
注2：フィリピンの生乳生産量は水牛乳およびヤギ乳を含む。

② 牛乳・乳製品の需給動向

ASEAN諸国では、牛乳・乳製品の生産量に対し、輸入量も消費量も多い状況にある(表4)。

2018年の牛乳・乳製品の1人当たり消費量を国別に見ると、インドネシアは、14.4キログラムとなった。調製粉乳と加糖れん乳の消費が多く、飲用乳の消費は大都市圏に限られ、量は少ない。

マレーシアは、56.2キログラムと、ASEAN諸国の中で最も多い。甘いものを好む習慣があることから、加糖れん乳が多く消費されており、牛乳はフレーバー付

きの需要が高い。輸出量は5カ国中最も多いが、これはニュージーランドや豪州から輸入した粉乳を原料として、国内で調製品に加工して再輸出しているためである。

フィリピンは、22.9キログラムとなった。国内で流通する牛乳・乳製品のほぼ全量が、ニュージーランド、米国、豪州などからの輸入乳製品および輸入品を原料とした加工品となっている。

タイは、35.6キログラムとなったが、デンマーク政府の協力により設立されたタイ酪農振興機構などの酪農業協同組合や外資系企業による牛乳・乳製品の生産拡大および学校給食用の需要などにより、消費量は増加傾向で推移している。なお、同年の牛乳・乳製品の輸出量は38万トンとなっている。これは、豪州、ニュージーランドから輸入した脱脂粉乳などを原料として、還元乳、はっ酵乳などへ加工の上、周辺国などを中心に輸出しているものである。

ベトナムは、26.6キログラムとなった。従来、同国では牛乳や乳製品の消費量は少なかったが、経済成長と政府の酪農振興策を背景に、近年、徐々に市民に受け入れられ、市場は拡大傾向にある。

表4 牛乳・乳製品の需給動向(2018年)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	(単位：千トン、kg)
					1人当たり消費量
インドネシア	951	2,913	3,810	53	14.4
マレーシア	39	2,418	1,818	638	56.2
フィリピン	24	2,485	2,421	87	22.9
タイ	1,233	1,619	2,472	380	35.6
ベトナム	936	1,787	2,541	182	26.6

資料：生産量は各国統計、それ以外はFAOの「FAOSTAT」
注：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口はIMFのデータを使用。

(2) 肉牛・牛肉産業

ASEAN諸国では、食習慣や経済発展の差が大きいことを背景に、牛肉の1人当たり消費量は、国ごとに大きな差があり、傾向としては増加基調にあるものの、各国とも大幅な増加とは言えず、横ばいで推移している。

牛肉消費が伸びない主な要因の一つに、伝統的に牛が役用として用いられていたことから特に雌牛のと畜年齢制限があった国が多く、牛肉が硬い肉というイメージが定着していたことなどが挙げられる。

① 牛の生産動向

2018年の肉用牛などの飼養頭数を国別に見ると、インドネシアでは、生体牛輸入規制の緩和により1643万

3000頭と前年とほぼ同数であった（図3、表5）。地域別では、首都ジャカルタのあるジャワ島が飼養頭数全体の約4割を占めている。また、豪州などから肥育もと牛を輸入して短期間肥育するフィードロット産業もあるが、経営体数は少ない。

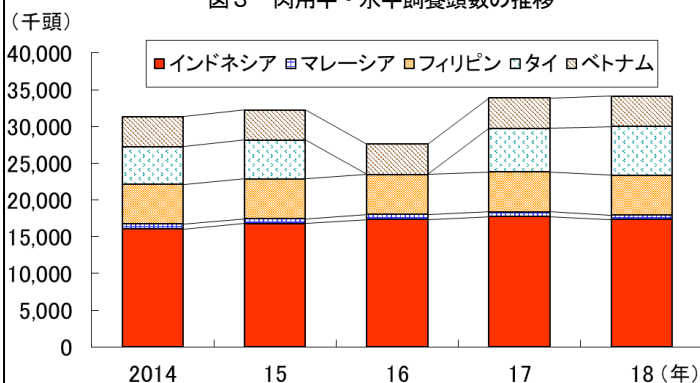
マレーシアの飼養頭数は55万7000頭（前年比5.3%減）であった。プランテーションで下草を食べさせる粗放的な一貫経営が多く見られるほか、フィードロットなどの集約的な経営を行っているところもある。

フィリピンの飼養頭数は255万4000頭（同0.2%増）となっている。豪州などから肥育もと牛を輸入する商業的なフィードロット経営も見られるが、飼養頭数20頭未満の小規模経営が大半を占めている。飼養頭数の多い水牛は、農作業の耕作や物資の移送のために役用として飼養されている。

タイでは、政府の肉牛振興政策などにより2001年以降微増傾向で推移しており、飼養頭数は544万5000頭（同11.7%増）となった。

ベトナムの飼養頭数は171万6000頭（同3.9%増）となった。生体牛をタイ、ラオス、カンボジアなどの近隣諸国や豪州から輸入して肥育を行う経営が一般的である。

図3 肉用牛・水牛飼養頭数の推移



資料：各国政府統計
注：2016年のタイの数値は未公表。

表5 肉用牛・水牛飼養頭数と牛肉生産量（2018年）

	飼養頭数				牛肉生産量 (水牛を含む)	
	肉用牛	前年比 (増減率)	水牛	前年比 (増減率)	前年比 (増減率)	前年比 (増減率)
インドネシア	16,433	0.0%	894	▲ 32.4%	523	1.5%
マレーシア	557	▲ 5.3%	48	▲ 11.8%	54	▲ 0.4%
フィリピン	2,554	0.2%	2,883	0.0%	406	▲ 1.0%
タイ	5,445	11.7%	1,181	14.7%	169	▲ 6.4%
ベトナム	1,716	3.9%	2,425	▲ 2.7%	427	4.1%

資料：各国政府統計
注：マレーシアの肉牛の飼養頭数は半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

② 牛肉の需給動向

2018年の5カ国の牛肉生産量（水牛肉を含む）を国別に見ると、インドネシアでは52万3000トン（前年比1.5%増）、マレーシアでは5万4000トン（同0.4%減）、フィリピンでは40万6000トン（同1.0%減）、タイでは16万9000トン（同6.4%減）、ベトナムでは42万7000トン（同4.1%増）となった（図4、表6）。

2018年の牛肉（水牛肉を含む）の1人当たり年間消費量を国別に見ると、インドネシアでは、2.8キログラムとなっている。牛肉の消費習慣は、民族・宗教によって異なり、消費地域は人口の6割が居住し、所得水準が高いジャカルタがあるジャワ島に集中している。

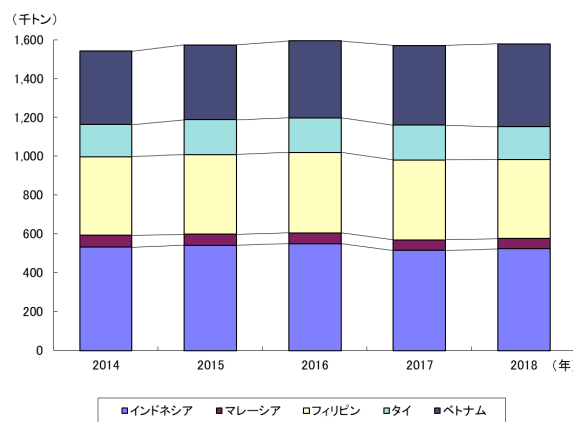
マレーシアでは、7.6キログラムとなった。牛肉自給率は2割程度で、輸入牛肉の割合が大きくなっている。主な輸入先国はインド、豪州である。

フィリピンでは、5.5キログラムであった。牛肉自給率は7割程度であり、主な輸入先は、インド、豪州、ブラジルである。このうち、インドからの安価な水牛肉は、国内法の規制によりコンビーフなどの加工用に限定されている。

タイでは、2.1キログラムとなった。輸入量は、1万8000トンと5カ国中で最も少ない。

ベトナムでは、11.3キログラムであった。牛肉自給率は4割弱であり、主な輸入先国は、インド、米国、豪州である。

図4 牛肉・水牛肉生産量の推移



資料：各国政府統計

表6 牛肉の需給動向（2018年）

(単位:千トン、kg)					
国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	523	208	730	0	2.8
マレーシア	54	198	246	6	7.6
フィリピン	406	174	579	1	5.5
タイ	169	18	143	44	2.1
ベトナム	427	657	1,077	7	11.3

資料：生産量は各国統計、それ以外はFAOのTFAOSTATJ

注1：水牛肉を含む。

2：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口はIMFのデータを使用。

3：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州含まず）。

(3) 養豚・豚肉産業

ASEAN諸国は、インドネシア、マレーシアをはじめ宗教上の理由から豚肉を食さないイスラム教徒の人口も多く、国によって豚肉の消費量には大きな差があり、豚肉の政策上の位置付けもさまざまである。他方、イスラム教徒が多数を占める国であっても、中国系住民などの豚肉需要はあり、飼養規模、地域など限定的ではあるものの、養豚業は存在している。

① 豚の生産動向

ASEAN諸国は、口蹄疫や豚繁殖・呼吸障害症候群（PRRS）などの疾病に加え、アフリカ豚熱が発生しているため、衛生対策が課題である。

2018年の豚飼養頭数を国別に見ると、イスラム教徒が比較的多く、1人当たりの消費量が少ないインドネシアおよびマレーシアでは、それぞれ825万4000頭（同0.1%減）、144万8000頭（同2.5%増）となっている（図5、表7、8）。両国の飼養頭数の差は、非イスラム教徒がインドネシアでは約3400万人であるのに対し、マレーシアでは約1200万人と、非イスラムの消費者人口によるものである。

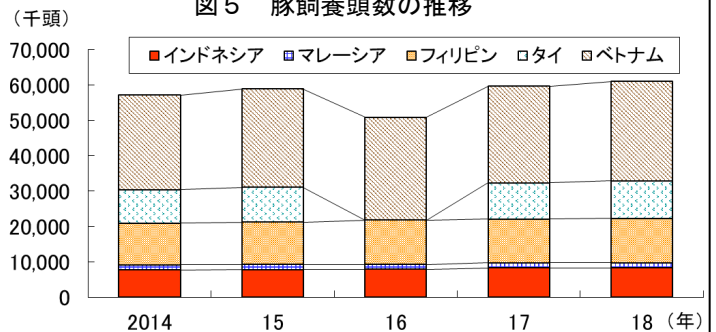
フィリピンは宗教的な制約が比較的少ないことから、5カ国の中でベトナムに次いで飼養頭数が多い。2018年は1260万4000頭（同1.4%増）となった。

タイでは、近年、価格変動や疾病などの影響により増減を繰り返しているが、2018年は1058万7000頭（同3.9%増）となった。

ベトナムでは、国内の豚肉需要の拡大を受けて2000～2005年にかけて増加し、その後は、疾病の発生や飼料価格の高騰、出荷価格の低迷などがあり、おおむね横ばいで推移した。直近では、2014年以降、

緩やかな増加傾向にあり、2017年は減少に転じたものの、2018年は2815万2000頭（同2.7%減）とやや戻している。

図5 豚飼養頭数の推移



資料：各国政府統計

注：2016年のタイの数値は未公表。

表7 豚飼養頭数と豚肉生産量（2018年）

(単位:千頭、千トン)				
国名	飼養頭数	前年比 (増減率)	生産量	
			生産量	前年比 (増減率)
インドネシア	8,254	▲0.1%	216	▲32.0%
マレーシア	1,448	2.5%	224	2.6%
フィリピン	12,604	1.4%	2,320	2.4%
タイ	10,587	3.9%	1,491	3.3%
ベトナム	28,152	2.7%	3,816	2.2%

資料：各国政府統計

注：マレーシアの飼養頭数は半島部のみ（サバ、サラワク州含まず）。

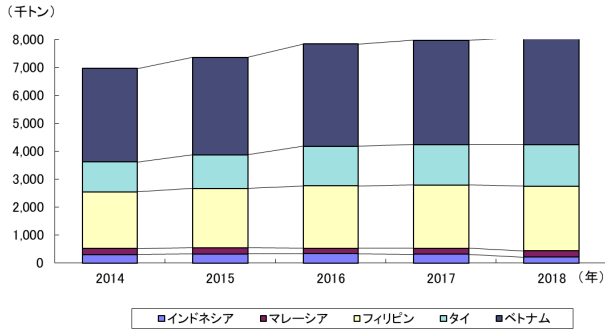
② 豚肉の需給動向

5カ国の豚肉生産量は、インドネシアは大きく減少したものの、全体的に増加傾向で推移しており、2018年は、インドネシアが21万6000トン（前年比32.0%減）、マレーシアは22万4000トン（同2.6%増）、フィリピンは232万トン（同2.4%増）、タイは149万1000トン（同3.3%増）、ベトナムは381万6000トン（同2.2%増）となった（図6、表8）。

ASEAN諸国の豚肉消費は、宗教の影響を強く受けており、2018年の1人当たり豚肉消費量は、イスラム教徒が人口の大半を占めるインドネシアで0.8キログラムであったのに対し、食肉に関する宗教的制約の少ないベトナムで40.5キログラム、フィリピンで23.4キログラム、タイで21.3キログラムとなっており、国による差が大きくなっている。

一方、マレーシアでは、イスラム教を国教と位置付けているものの、伝統的に豚肉を好む中国系住民（非イスラム教徒）などが人口の4割程度を占めていることから、国全体では7.7キログラムとなっている。

図6 豚肉生産量の推移



資料：各国政府統計

表8 豚肉の需給動向（2018年）
(単位：千トン、kg)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	216	4	219	0	0.8
マレーシア	224	31	249	5	7.7
フィリピン	2,320	154	2,472	2	23.4
タイ	1,491	0	1,480	12	21.3
ベトナム	3,816	67	3,873	10	40.5

資料：生産量は各国統計、それ以外はFAOの「FAOSTAT」
注1：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口はIMFのデータを使用。
注2：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

(4) 養鶏・鶏肉・鶏卵産業

① 鶏の生産動向

ASEAN諸国では、肉用鶏や採卵鶏の飼養が盛んであり、在来鶏やブロイラーのほか、アヒルなどの家きんも飼養されている。

インドネシアの2018年の肉用鶏の生産羽数は34億3869万羽（前年比6.7%増）となっており、このうち約9割がブロイラーとなる。ブロイラーの生産は、西ジャワ州、東ジャワ州、中部ジャワ州で盛んであり、当該3州で全国の生産羽数の半数以上を占めている。また、採卵鶏および地鶏生産も当該3州が盛んである。人口増加と可処分所得の増加などにより鶏肉需要は増加しており、引き続き鳥インフルエンザの発生はあるものの、同年の鶏肉生産量は369万7000トン（同6.4%増）となった（図7、表9）。

同年の採卵鶏の飼養羽数は、2億6193万羽（同1.2%増）、鶏卵生産量は468万8000トン（同1.

2%増）となった。

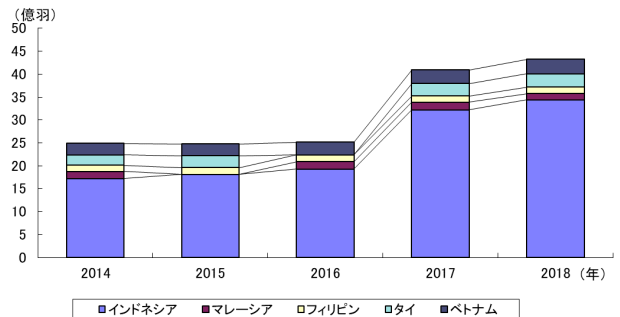
マレーシアの肉用鶏の飼養羽数は、2005年の鳥インフルエンザの発生から徐々に回復していたものの、2018年にはかなり大きく減少し、1億3869万羽（同14.9%減）、鶏肉生産量は165万4000トン（同0.7%減）となった。2018年の採卵鶏の飼養羽数は、肉用鶏と同様に減少し、5602万羽（同3.5%減）、鶏卵生産量は、82万4000トン（同4.7%減）となった。

フィリピンの肉用鶏の飼養羽数は、1億4020万羽（同0.5%減）、鶏肉生産量は183万7000トン（同5.2%増）となった。採卵鶏の飼養羽数は3556万9千羽（同3.2%増）、鶏卵生産量は53万4000トン（同8.4%増）となった。

タイでは、鳥インフルエンザが発生した2004年以降、日本やEU向けなどの生鮮鶏肉の輸出が停止していたが、EU向けは2012年7月、日本向けは2013年12月、韓国向けは2016年11月に解禁した。2018年の肉用鶏の飼養羽数は、2億9100万羽（同8.8%増）、鶏肉生産量は217万2000トン（同4.4%増）となった。採卵鶏の飼養羽数は5732万2000羽（同2.8%減）、鶏卵生産量は83万3000トン（同2.3%増）となった。

ベトナムの肉用鶏の飼養羽数は、近年増加傾向で推移しており、2018年には3億1691万6000羽（同7.4%増）、鶏肉生産量は109万7000トン（同6.4%増）となった。2018年の鶏卵生産量は、67万5000トン（同9.5%増）となった。

図7 肉用鶏飼養羽数の推移



資料：各国政府統計
注：2015年のマレーシアおよび2016年のタイの数値は未公表。

表9 鶏の飼養羽数と鶏肉・鶏卵の生産量（2018年）

国名	飼養羽数				生産量			
	肉用鶏	前年比 (増減率)	採卵鶏	前年比 (増減率)	鶏肉	前年比 (増減率)	鶏卵	前年比 (増減率)
インドネシア	3,438,685	6.7%	261,933	1.2%	3,697	6.4%	4,688	1.2%
マレーシア	138,690	▲14.9%	59,015	▲3.5%	1,654	▲0.7%	824	▲4.7%
フィリピン	140,203	▲0.5%	35,569	3.2%	1,837	5.2%	534	8.4%
タイ	291,003	8.8%	37,322	▲2.8%	2,172	4.4%	833	2.3%
ベトナム	316,816	7.4%	-	-	1,097	6.4%	675	9.5%

資料：各国政府統計

- 注1：タイとベトナムの鶏卵は1個58グラムで換算。
 注2：インドネシアの肉用鶏は生産羽数の数値。
 注3：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州含まず）。
 注4：ベトナムの採卵鶏の飼養頭数は非公表。

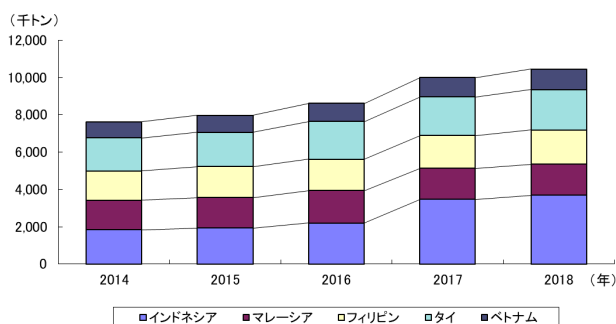
② 鶏肉の需給動向

鶏肉は宗教上の制約が少ないことから、ASEAN諸国では最も身近で重要な動物性たんぱく質となっており、経済成長に伴う消費の伸びを受け、生産量は増加傾向で推移している（図8、表10）。需要の増加を背景に、外資による食鳥処理場の整備や大手ファストフード企業の参入などが増加している。

2018年の各国の1人当たりの鶏肉消費量を見ると、マレーシアは、51.7キログラムとなった。同国は、イスラム教を信仰するマレー系などが人口の過半を占めていることから、宗教的な制約が少ない鶏肉が多く消費されている。

タイは、15.0キログラムと引き続き微増となった。同国は鶏肉の輸出に注力しており、輸出の伸びを背景に鶏肉生産量も増加傾向にある。

図8 鶏肉生産量の推移



資料：各国政府統計

表10 鶏肉の需給動向（2018年）

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	3,697	0	3,697	0	14.0
マレーシア	1,654	72	1,674	52	51.7
フィリピン	1,837	282	2,118	1	20.0
タイ	2,172	2	1,038	1,136	15.0
ベトナム	1,097	598	1,692	3	17.7

資料：生産量は各国統計、それ以外はFAOの「FAOSTAT」

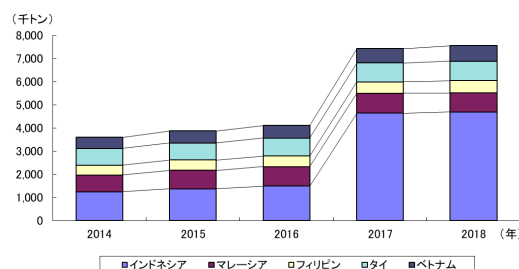
- 注1：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口はIMFのデータを使用。
 注2：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州含まず）。鶏卵の需給動向

③ 鶏卵の需給動向

東南アジア諸国では、鶏卵価格の変動に伴って生産量を調整する需給安定機能が十分に働かないことから、供給過剰とひっ迫を繰り返すという問題を抱えている。

鶏卵消費量はマレーシア、インドネシアの順に多く、2018年はそれぞれ年間1人当たり21.5、17.7キログラムとなり、一方で、最も少ないフィリピンでは同5.0キログラムと、国によって大きな開きがある（図9、表11）。

図9 鶏卵生産量の推移



資料：各国政府統計

表11 鶏卵の需給動向（2018年）

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人1年当たり消費量
インドネシア	4,688	0	4,688	0	17.7
マレーシア	824	0	698	127	21.5
フィリピン	534	0	534	0	5.0
タイ	833	0	811	22	11.7
ベトナム	675	0	674	2	7.1

資料：生産量は各国統計、それ以外はFAOの「FAOSTAT」

注1：タイとベトナムの鶏卵は1個58グラムで換算。

注2：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口はIMFのデータを使用。

注3：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州含まず）。